



## ザンビアにあるTICOの活動フィールドを訪問して

滋賀医科大学医学部医学科3年 大橋 瑞 紀



モンボシのヘルスポスト(左)とお産を待つ家(右)

2012年8月、徳島を拠点として活動しているNGO団体、TICOが支援しているザンビアというアフリカの国を訪問しました。TICOは現在、首都ルサカから車で2時間ほどのモンボシ地域において、妊産婦死亡率の改善に取り組んでいます。私は、TICOが活動しているモンボシ地域を5日間訪れ、ヘルスポストの見学や、現地ボランティアの住む村でのホームステイを通じて、現地の医療や生活の様子を学ぶことができました。



ヘルスポストの待合室

モンボシのヘルスポストには、看護師(兼助産師)が一人しかおらず、365日24時間の診療はほぼ彼女一人が

担っていました。看護師以外にも数人のボランティアが活動しており、血圧測定や、マラリアおよびHIVの検査等、ボランティアの力に頼っている面も多く、ボランティアの誠実さに感銘を受けるとともに、改善点の一つであると感じました。私が訪れた日も、HIVの検査を行っており、一組の夫婦がHIV陽性でした。日本では実感することのないHIVの存在を目の当たりにし、戸惑いを感じました。



HIVの検査をしている様子

TICOは、ヘルスポストから歩いて何時間もかかる村に住む妊産婦が安全なお産をできるように、ヘルスポストの側に「お産を待つ家」という、お産を間近に控えた妊産婦が待機できる施設を建設しました。



安全なお産について説明をする現地ボランティア



予防接種をしている様子

しかし、そもそもヘルスポストには看護師が一人しかおらず、お産を待つ家をカバーできるマンパワーがないため、すぐには実用に至らないのが現状のようでした。現在、政府にもう一人看護師を派遣してもらえるように交渉中とのことでしたが、一筋縄にはいかない支援の難しさや、ひとつひとつの交渉の重みを感じました。



朝ご飯を作っているところ

ッフの方々や、地元のために誇りを持って活動するボランティアの姿を見て、問題点を共有し、納得し、改善に向けて共に努力することの必要性を感じました。私もまたいつか、ザンビアの人々が抱える問題と向かい合うために、ザンビアの地を再び訪れたいと思っています。



現地ボランティアのミーティングの様子

モンボシ滞在中は、現地ボランティアの家にホームステイをしました。簡素な生活ですが、子供達の笑い声に満ちた、穏やかな毎日でした。幸せそうに暮らす彼らを見て、私たちのような外部の人間ができることはないのではないか、と思う時もありました。

しかし、現地の人々も気づいていないような隠れたリスクを見出し、信頼されながら活動しているTICOスタ



ヘルスポストや村でお世話になったみなさま



村長さんにご挨拶に行った時



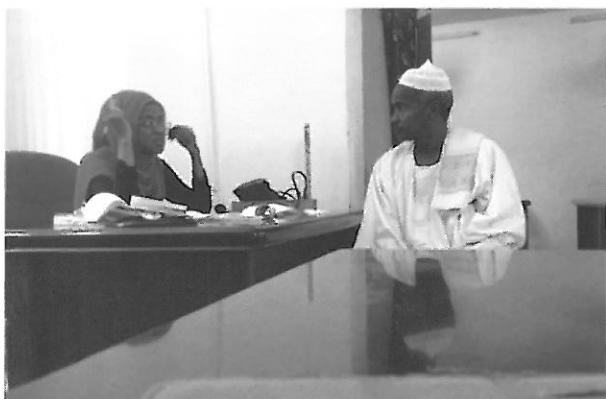
## スーダンの臨床の現場を肌で感じて

宮崎大学医学部医学科5年 山下 創



Tropical Hospital の入り口

私は2012年8月6日～25日までの約3週間、国際医学生連盟日本(IFMSA-Japan)の臨床留学のスキームを利用して、スーダンの National Ribat University Department of Tropical Medicine 及び Tropical Diseases Teaching Hospital にて臨床実習をする機会に恵まれました。



熱帯病外来の診察風景

実習先にスーダンを選んだ理由は、自分が医師を目指すきっかけになったのが、ウガンダにあるスーダン難民キャンプでのボランティア活動であったこと、そして、将来アフリカで臨床医として働くことに興味があり、大学でも臨床実習が始まり、日本との比較ができるようになったこのタイミングで現場の医療を体感したかったためです。



朝カンファレンスの様子

実習期間の1日のスケジュールは大学病院での8時からのカンファレンスに始まり、10時頃にはスーダンで唯一の熱帯病専門病院である Tropical Diseases Teaching hospital に移動し、熱帯感染症外来・病棟の見学をします。ラマダーン期間中であったため、日がのぼっている間は飲食禁止。途上国の人是一般にどこかのんびりしたイメージがあると思いますが、私が実習をした病院の医師・看護師は患者さんが途絶える14時～16時頃まで食事も食わず、休みなく働いていました。



大学病院の検査室にて

病院には、マラリアやリーシュマニア、寄生虫症、重症結核の患者さんが毎日のように訪れます。



Tropical Hospital の待合室

日本では教科書の中でしか出てこないような疾患で苦しんでいる人がこんなにもいるということに改めて衝撃を受けました。これらの病気に対する診断は手慣れたもので、また治療についても比較的充実しているのが印象的でした。

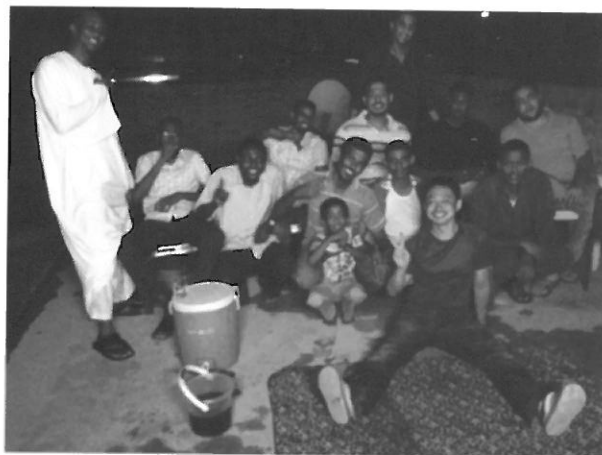


専門病院での内視鏡検査

一方で、腹水でお腹がはりさけんばかりの患者さんなど、肝炎や癌など大学病院でも見かける疾患が非常に進行した状態になってようやく病院にかかる人も珍しくないようです。

スーダンでは公用語がアラビア語であるため、直接、患者さんに対して問診をするということは出来ませんが、指導医の先生に適宜会話を訳してもらい、ア

フリカ第3位の国土面積をもつスーダンならではの多様な患者さんのバックグラウンドや医療費支払いの問題、病院へのアクセスなどについて考えさせられました。また、珍しいケースに関しては聴診や触診、視診をさせてもらい、熱帯感染症をまさに肌で感じる事ができました。



現地の医学生と

わずか3週間ではありましたが、今回の実習を通して、途上国の医療の現状と、自分が将来、現場で働く際に何が必要になって来るか、おぼろげながら見えた気がします。また、コモンな病気は日本も途上国も大差なく、きちんとした経験を積み、十分に臨床の現場で働いて行ける手応えをつかめました。今回の経験を糧に、少しずつ、自分の夢であるアフリカでの臨床に近づいて行きたいと考えています。



ラマダーン中の「朝食」(午前7時過ぎ)

広告

tearai.jp

成果レポート公開中



SARAYA

# 100万人の手洗いプロジェクト

子どもたちの命を守る手洗いを、  
世界に広めたい。

サラヤ・ユニセフ支援プロジェクトは3年目へ。

日本で初めて薬用石鹸液を開発したサラヤは、今、世界の衛生環境を守るSARAYAへ。

衛生製品の売上げの一部で、アフリカ・ウガンダでのユニセフ手洗い普及活動を支援しています。

We Support

SARAYA unicef 